

97) Dandy's Approach による深部 AVM の4治験例

畑中 光昭 (十和田市立中央病院 脳神経外科)

深部の AVM は microsurgery の導入をもってしても摘出困難な手術となる事は変りはない。我々はこれまで、第Ⅲ脳室、上位脳幹部に認められた AVM 5例中4例に occipital interhemispheric or transtentorial approach (いわゆる Dandy's approach) による手術を行なったが、手術方法を中心に述べたい。対象は第Ⅲ脳室後半～視床の AVM 1例、側脳室から上位脳幹部 AVM 2例、上位脳幹正中部 AVM 1例で、流入動脈は脈絡膜動脈、後大脳動脈、上小脳動脈で、導出静脈はガレン静脈に注いでいた。4例中、両側後頭開頭2例、1側後頭開頭2例で、摘出2例、摘出及びnidusの焼灼1例、摘出及び流入動脈のクリップ1例を行なった。4例中3例に術中血管写を行なった。

結論：①本法では進入時、最初にガレン静脈が出るが、nidus 到達に際して、案外防害にならなかった。②視野が狭いため、流入動脈、nidus の拡がりが十分把握できず、1例、後大脳動脈を遮断による半盲をみた。③そのためにも術中血管写の重要性を認めた。

98) Contralateral transfalcial approach を併用し摘出した frontal AVM の1例

宗田 庸・根本 仁 (福島県立医科大学) 脳神経外科
太田 守・石井 完治
佐々木達也・児玉南海雄

症例は21才男性で突然の頭痛にて発症した。CTにて右前頭葉に脳内出血および脳室穿破を認め、右内頸動脈撮影にて右前頭葉内側面に2×2×1.5cmのAVMを認めた。Feederはcallosomarginal arteryでmain drainerはnidusの前方で大脳半球間裂を上行し脳表を外後方へ走行した後上矢状洞へ流出していた。Approachに関してはnidusの外側に血腫があるが、feederおよびdrainerが大脳半球間裂にあるためdrainerを損傷せずにfeederを処置するには大脳鎌を切開し対側からのapproachが必要と考え、SSSを中心に両側にまたがる開頭を行った。まず右側の硬膜を切開したが、drainerとの癒着が強く硬膜を翻転できなかつた。そこで対側の硬膜を切開し大脳半球間裂に至り、大脳鎌を切開、callosomarginal arteryのnidusに入るbranch数本を処置した後、nidus全周を剥離した。Drainerがblue veinとなったところで右側からdrainerを処置し、nidusを摘出した。術後、神経学的異常は認められず経過良好で、脳血管撮影

にてもnidusは消失していた。本症例のapproachにつき考察を加え報告する。

99) 妊娠期に出血で発症した MVM (medurally venous malformation) の2例

瓢子 敏夫・佐々木雄彦
荒 清次・宇佐見 卓
岡田 好生・武田利兵衛 (中村記念病院) 脳神経外科
鎌田 二・堀田 隆史
中村 順一
末松 克美 (財団法人 北海道脳神経疾患研究所)

妊娠、分娩、産褥期における母体特有の循環動態の変化は、頭蓋内の環境にも多大な影響を及ぼし、子癇や、頭蓋内出血といった形で発症する事が知られている。頭蓋内出血については、その頻度は少ないものの、重篤な症状を呈し、母体と胎児の管理、妊娠の継続、外心的治療の適応、麻酔等、脳神経外科医にとって直面する課題は多い。我々は妊娠中期に出血にて発症した、MVM (medurally venous malformation) の2例を経験し、本症の出血機序、妊娠との関連等について、文献的考察を加え報告する。

症例1：34才女性、妊娠20週に緩徐に進行する右片マヒと構音障害にて発症し第3病日に当科入院。CTにて小脳出血、脳動脈造影にて左小脳半球全体を灌流するMVMと診断、保存的に治療し軽度小脳症状を残すのみで退院。

症例2：29才女性、妊娠15週に突然の意識障害、右片マヒにて発症。CT上、左前頭葉に脳内血腫を認め、脳動脈造影にてMVM with arterial componentと診断。第2病日に根治術施行、現在リハビリテーション中である。

100) Wyburn-Mason 症候群の1小児例

菊地 顕次・古和田正悦 (秋田大学) 脳神経外科
坂本 哲也
玉川 芳春 (同 放射線科)
桜木 章三 (同 眼科)

Wyburn-Mason 症候群は同一側における1)網膜の動静脈奇形、2)頭蓋内とりわけ視床付近の動静脈奇形、3)眼窩及び顔面の血管性母斑を特徴とする極めて稀な先天性血管異常である。最近、左眼球突出で発症したWyburn-Mason 症候群の1例を経験したので、神経放射線学的に検討し、併せて文献的考察を加え報告する。

症例は7歳女児で、昭和61年5月に左眼球突出と左網膜の異常血管が指摘された。入院時、神経学的に右同名

半盲のほかには異常所見はなく、眼科学的に左眼球結膜の充血と左眼球突出(突出度:右10mm,左15mm)があり、左網膜上に怒張・蛇行する異常血管が認められた。また眼窩周囲に bruit が聴取された。単純 CT で左基底核部後方に不整な淡い低吸収域があり、造影剤の注入で著明に増強され、左視床・基底核部の動静脈奇形と診断された。脳血管撮影で拡張した左内・外レンズ核線状体動脈、前・後脈絡動脈及び視床穿通動脈が流入動脈として描出され、拡大・蛇行した流出静脈がガレン大静脈、蝶形頭頂静脈洞及び横静脈洞に流出していた。さらに左眼動脈末梢部に不規則な異常血管網が造影された。

101) 重症頭部外傷外減圧後に著明な脳室拡大を来した acquired dural arteriovenous malformation の1例

長堀 毅・山谷 和正 (富山医科薬科大学) 脳神経外科
高久 晃
神山 和世・斎藤 隆景 (斎藤記念病院) 脳神経外科

硬膜動静脈奇形の発生機序に関しては、現在尚諸説紛々としており定説がない。最近硬膜動静脈奇形に先立ち静脈洞栓塞を認める症例の発見により、かつて重視されていた先天性説に対し、静脈洞栓塞にもとづく後天性説が主張されている。今回我々は、重症頭部外傷後に、正常圧水頭症様病態を呈した症例において、硬膜動静脈奇形の発生を認めたので報告する。患者は27歳男性、左急性硬膜下血腫・脳挫傷、右硬膜外血腫に対し、両側血腫除去を行ない、左側には外減圧を施行した。術後左大脳半球の腫脹の消退と共に両側側脳室の著しい拡大を認め、減圧部の膨隆を認めた。受傷後3週の血管撮影では左横静脈洞の造影を認めず、5ヶ月後の血管撮影で、左 Labbe 静脈の消失、そして左後頭部に硬膜動静脈奇形の発生を認めた。CT では、当初、脳挫傷単独とは思えない、広範囲な低吸収域、出血を左大脳半球に認め、静脈洞栓塞による静脈環流障害を示唆していた。以上から本症例では急性期に左横静脈洞栓塞を来し、その後硬膜動静脈奇形へ進展したものと考えた。そしてこの一連の病態も著明な脳室拡大の一因と考えた。

102) 大後頭孔硬膜動静脈奇形の1例

加藤 甲・中村 勉 (金沢医科大学) 脳神経外科
東 徹・郭 隆 稜
角家 暁

10年間に3回の SAH を繰返した大後頭孔硬膜動静脈奇形を経験したので報告する。

症例は43歳、S52年12月28日突然、後頭部痛を訴え、

緊急入院、L.P で SAH と診断された。脳血管撮影で出血源は判明せず、神経脱落症状なく退院した。9年後のS61年12月29日にも突然、後頭部痛を認めたが、約5日間で消失した。S62年1月9日同様の痛みがあり入院、入院時神経学的所見は意識清明、軽度項部硬直を認めるのみで、発作3日後の L.P は xanthochromia であった。Enhanced CT では、延髄背側のくも膜下腔に増強効果を呈する病巣があり、MRI で同部は無信号、脳血管撮影で大槽部に拡張した異常血管網が造影され、流入動脈は両側上行咽頭動脈、流出静脈は後頭静脈洞と両側錐体静脈であった。Dural AVM と診断し、手術は腹臥位にて両側後頭下開頭、C1 後弓除去を行い大槽部の拡大した異常血管網を後頭静脈洞周囲の肥厚した硬膜とともに全摘した。同部には軟膜の小動脈も流入しており mixed pial-dural AVM と診断した。大後頭孔に局在し後頭静脈洞と錐体静脈を流出静脈とする dural AVM は極めて稀であるので報告した。

103) 脳内出血で発症した前頭蓋窩硬膜動静脈奇形の1例

蘇 慶展・高橋 明 (東北大学脳研) 脳神経外科
永山 徹・安孫子 尚
新妻 博・鈴木 二郎

前頭蓋窩硬膜動静脈奇形は稀で、他部位の硬膜 AVM と異なるいくつかの特徴をもっている。今回、前頭葉の脳内血腫、硬膜下血腫にて発症、根治術を行った一例を経験したので、これまでの症例を加えて報告する。

〔症例〕65歳女性、昭和60年11月左眼窩上部を1針縫合する外傷、昭和61年10月より両側緑内障にて点眼治療の既往あり。昭和62年2月28日、右前頭葉底部の脳内出血にて入院した。両側内外頸動脈写にて右前篩骨動脈を feeder とし、右嗅神経窩に動静脈シャントを有し、vascular sac を経て上矢状洞に流出する硬膜 AVM と診断された。昭和62年3月10日両側前頭開頭にて全摘術を行った。術中時期を異にする硬膜下出血が認められ、また脳内血腫内に vascular sac を認め、これは易出血性で術中破裂をおこし出血源と考えられた。術後経過良好である。

〔考察〕前頭蓋窩硬膜 AVM はこれまで本症例を含め18例の報告があり、中年男性に好発し、ほとんどが頭蓋内血腫で発症し、すべて前篩骨動脈が関与し、drainer に vascular sac を伴うことがおおい稀な疾患である。血管写上の特徴、成因などにつき考察する。